

マンガ「片町夜曲(セレナーデ)」 # 2 1 原作シナリオ

山崎浩治

マンガ「片町夜曲(セレナーデ)」 # 2 1 原作シナリオ

1 オネエ所長のマンション・寝室(真夜中)

布団の上で泣きじゃくる菜摘を抱っこしているオネエ所長。

菜摘「トオルちゃん、ごめんね！ なっち、なっちね……」

オネエ所長「トオルちゃんの夢見たの？ どうしたの、なっち？」

菜摘「(泣いて言葉にならない)……」

2 居酒屋「まわりみち」店内(翌日の夜)

カウンター席で食事しているオネエ所長、菜摘、サオリ。

カウンターの中では末吉だけが働いている。

オネエ所長「アヤカはまだバイト、休んでるのね」

末吉「トオル君のことがよっぽどショックやったんやな。大学にもスナック香澄にも行っとらんらしい」

アヤカレーを食べている菜摘の手が止まる。

菜摘「(悲しげに固まって)……」

サオリ「(そんな菜摘に気付いて怪訝)……」

3 アヤカの実家・アヤカの部屋

ベッドに寝転んで、ぼんやり天井を見ているアヤカ。

部屋のコルクボードには教育実習中に撮ったトオルの写真が飾られている。

一夫「(ドアが開いて、顔を出し)アヤカ、晩メシできたぞ」

アヤカ「……いらない」

4 公園(別の日の昼)

菜摘とサオリが何やら話し込みながら砂場で遊んでいる。

近くのベンチに腰掛けているオネエ所長。

サオリ「(ふとオネエ所長を見て)……」

オネエ所長「(放心しているその横顔)」

× ×

イメージ。微笑んでいるトオル。

× ×

オネエ所長の眼前に缶コーヒーが突き出された。

サオリ「(缶コーヒーをオネエ所長に渡し)いつまでなっちの面倒見るつもりなのよ」

オネエ所長「家出した母親が帰ってくるまで。誰かが面倒見なきゃ」

サオリ「だからっておっさんができるわけないだろ」

オネエ所長「これまでだって、ちゃんとなっちの母親代わりやっています」

サオリ「おっさんは昔、刑事の仕事で家を全然顧みなかった。そのあげく、`自分の人生を生きたい、ってお母さんとあたしを捨てたのよ。そんな人に父親代わりできるわけじゃない」

オネエ所長「だから、母親代わりだって言ってるでしょ！」

サオリ「あたしが初めて逆上がりできたの、いつか知ってる？」

オネエ所長「それは……(答えられない)」

サオリ「初めて補助輪なしで自転車に乗れたのは？」

オネエ所長「……(答えられない)」

サオリ「ほらね。自分の娘のことだって何にも知らないくせに」

砂場で遊んでいる菜摘。公園には三輪車に乗って遊ぶ幼児たちもいる。

サオリ「なっちがいま、一番何がほしいか知ってる？ ママ以外でよ」

オネエ所長「……(考えるが、分からない)」

サオリ「三輪車」

オネエ所長「あたしには何も言わないわよ」

サオリ「(ため息を吐いて)本当に何にも知らないのね」

砂場で遊んでいる菜摘。

サオリのM「なっちのママが言ったそうよ。『お祈りしたら願い事は叶う。でも願い事は3つだけ』って」

× ×

インサート(第20回)。

菜摘「お祈りしたら願い事は叶うって、ママが言ってたよ」

× ×

サオリ「なっちはすでに2つ、願い事をしてるの。『ママ、早く帰ってきて』『おばあちゃん、死なないで』って」

オネエ所長「(顔色を変えて)……」

菜摘、羨ましそうに三輪車に乗る子どもたちを見ている。

そんな菜摘を見つめているオネエ所長とサオリ。

サオリのM「なっちは願い事があっても、あと1つしかできないと思い込んでる。だから『三輪車を買って』っておっさんに言えなかったのよ」

オネエ所長「なっちはサオリに本心を打ち明けたのね」

× ×

フラッシュ。何やら話しながら砂遊びをしている菜摘とサオリ。

× ×

オネエ所長「あんたには探偵の才能があるわ」

サオリ「アホか、おっさん。そんなの名探偵じゃなくたって分かる。トオルさんが死んで悲しいのは分かるけど、なっちのことをちゃんと見てあげて」

#5 オネエ所長のマンション・リビング(その日の夜)

オネエ所長がパジャマ姿の菜摘の髪を梳かしている。

オネエ所長「あたしにしてほしいことがあるんなら、ちゃんと言いなさいよ」

菜摘「おじちゃん……なっち、アヤカと話したい」

#6 七尾湾を望む公園(翌日の昼)

並んでいるアヤカと菜摘の背中。

アヤカ「あたしに話ってなに？」

菜摘「なっち、アヤカに`ごめんね、したかったの」

アヤカ「(怪訝に)どうして？」

菜摘「なっちね、お願い事3つしかできないんだ。ママがそう言ったから……でも、もう2つお願い事しちゃった」

アヤカ「(菜摘の表情を覗き込んで)……」

菜摘「(その瞳から涙があふれ出し)だから、『トオルちゃんの病気が治って』ってお願いしなかったの。トオルちゃんが死んじゃったのは、なっちのせい。なっち、トオルちゃんのこと、大好きだったのに」

アヤカ「なっち……」

菜摘「(ぼろぼろ泣きながら)アヤカもトオルちゃんのこと大好きだったんだよね。ごめんね、アヤカ……なっちのためにアヤカレー作ってくれたのに」

アヤカ「(その瞳から一筋の涙が流れる)……」

菜摘「なっち、3つ目のお願い事する。アヤカが元気になりますように！」

泣きながらお願い事をする菜摘を抱きしめるアヤカ。

菜摘「早く元気になって、アヤカ！」

アヤカ「(泣きながら)あたし、元気になるから！ もう泣かないで、なっち！」

そんな二人の姿を遠くから見つめているオネエ所長とサオリの背中。

#7 公園(別の日の夕方)

菜摘が楽しそうに三輪車に乗っている。

その姿をベンチに腰掛けたオネエ所長とサオリが眺めている。

サオリ「なっちに`本当に大切なことはいくつお願い事してもいい、って言ったそうね」

オネエ所長「(ぽつんと)……小1よ」

サオリ「え、何」

オネエ所長「サオリが初めて補助輪なしで自転車に乗れたのは」

サオリ「(オネエ所長を見て)……」

オネエ所長「あたしも一緒にいたじゃない、忘れたの？」

サオリ「(何かを思い出して)……あ」

× ×

フラッシュ。公園(サオリの回想)。

サオリ(小学生)が乗った自転車を支えている若き日のオネエ所長(メンズスーツ姿)。
自分の手から離れ、よろよろ走り出す自転車に、飛び跳ねて喜ぶオネエ所長。

× ×

オネエ所長、菜摘、サオリが夕陽に溶けていく。